

田中優子

● 喜撰（愒気の独楽）

この上方落語には『喜撰』や『喜撰小僧』等の別名がある。これらでは、丁稚の定吉が本妻に問い詰められる場面に音曲を使った。上方から『愒気の独楽』前半を明治になって三代目・柳家小さんが東京に移し、四代目・古今亭志ん生が改作したようだが正確には確認できない。喜撰とは平安時代の六歌仙の中の一人喜撰法師のことで、それを題材にした清元節と長唄の掛け合いによる舞踏劇（所作事）五変化『六歌仙容彩（ろっかせんすがたのいろどり）』の、四番目の曲を指している。茶汲み女のお梶（小野小町）に見とれた喜撰法師が茶碗を落とし、二人で口説きの踊りを始める。最後は大勢のお迎え坊主が出て住吉踊りとなり、そこで詠われるのが「世辞で丸めて浮気でこねて…」である。八代目春風亭柳枝は父親が音曲師だったからか、この演目が得意だったようだ。

● 江戸時代の喫煙道具（普段の袴）

喫煙が広く民衆に受け入れられ、喫煙道具を含めた一大文化にまで発展したのは江戸時代である。噺の中で、侍が骨董屋で喫煙をする際に、詳細に喫煙道具を描写する場面がそれを物語っている。江戸時代の喫煙道具の代表はキセルであろう。キセルはポルトガル船の乗組員によってもたらされ、カンボジア語でパイプを意味するクシェルが語源だ。日本人は外来物を日本化させるのが得意だった。初期のキセルは70cmを超える長さだったが「細刻みたばこ」の登場によって、大きな火皿と短い筒のキセルへと変化した。こうして携帯できるようになったキセルは、アクセサリーとしての性格も加わって根付けと緒締を付随した革や布のタバコ入れと共に持ち歩くものとなり、趣向を凝らすことのできる道具となった。屋内では火入れ、灰落し、キセル置き等をまとめた「たばこ盆」が登場した。

### ● 亀清と柳橋（干物箱）

神田川が隅田川に合流する手前の橋と、橋の北側一帯の地名を柳橋という。この演目にはその柳橋にあった料亭・亀清楼が出てくることがある。一六五七年の明暦の大火が江戸市中の大部分を焼いた。現在の人形町にあった元吉原も消失し、新吉原として浅草へ移転した。新吉原へと客の流れが移り急増したことで、柳橋は地の利を得ることになる。新吉原へ向かう道順として、大川を猪牙舟で北上して山谷堀の奥で舟を降り、そこから歩くルートが流行り、柳橋に船宿が増えたのだ。船宿は更に宴席を兼ねるようになり、近隣には料亭や酒楼が林立して柳橋は花街として栄えた。柳橋には時代も味方した。天保の改革の取締りによって深川が衰退して辰巳芸者が柳橋に移り、柳橋芸者と言われたのだ。柳橋芸者は芸を重んじ、江戸の粋を体現する水準の高さが評判だった。

### ● ソメイヨシノ（花見酒）

私たちが見ているソメイヨシノは、全てが接木・挿木で育つクローンである。それ故に同じ気温で開花し、桜前線のニュースが流れる。通説ではソメイヨシノは、幕末に江戸染井村（豊島区駒込）の植木職人らによって売り出されたとされる。辞書を調べても同じで、「交配した」ではなく「売り出された」なのである。調べるうちに、ある放送局記者の調査記事に行き当たった。染井村の最初の一本が人為的に交配されたのか、それとも自然にできたのか起源や由来は謎のようだ。ソメイヨシノが、オオシマザクラとエドヒガンの品種がかけ合わされて誕生したことを踏まえ、では「エドヒガンとオオシマザクラを交配するとソメイヨシノになるのか」という交配実験を重ねている研究所があるという。全ゲノム解析（すべてのDNA配列を読み解く）から、どんな結果が出るのか楽しみだ。

## ● 浄瑠璃と義太夫節（寝床）

邦楽の分類名称は難しい。江戸時代は義太夫節を義太夫と言うように「節」を省略することも多く、さらにややこしい。浄瑠璃は三味線音楽を伴った語り物の総称で、三味線音楽は流派が多数あった。語り物自体は三味線導入以前から存在したが琵琶と合わせる事が多く、三味線と合わせるようになったのは江戸時代からだ。三味線の導入から、浄瑠璃は一層盛んになった。戦争がなくなり文化を担う人々や楽しむ人々が増えたことも一因だろう。歌舞伎や人形劇などを盛り上げる音曲として、都市だけでなく全国各地で歓迎された。義太夫節は浄瑠璃そのものと思われがちだが、浄瑠璃の一派を指す。創始者・竹本義太夫の節回しという意味で、義太夫節と呼ぶ。低音の力強い太棹三味線を大きめの撥で演奏し、近松門左衛門の作品を語ったことで人気を博し、発展したのである。

## 田中優子（法政大学名誉教授、江戸東京研究センター特任教授）

法政大学社会学部教授、学部長、法政大学総長を経て現職。

専門は江戸時代の文学、美術、生活文化、アジア比較文化。

現代社会についての連載エッセイなどもある。

『江戸の想像力』で芸術選奨文部大臣新人賞

『江戸百夢』で芸術選奨文部科学大臣賞、サントリー学芸賞

その他著書多数。2005年紫綬褒章。